

根源的網羅思考によるオブジェクト特定と命題,法則の変更

高原 利生 ()

1 . はじめに

生きることは現実を認識し変更することである。現実を構造的網羅的に変更可能なものとして認識し、網羅したものに對し可能な変更を極限化するのが、根源的網羅思考である[FT10] [TS06]。

本稿は、根源的網羅思考の、オブジェクト特定、命題,法則に対する態度を述べる。

前提となる概念を整理しておく[TS04]。オブジェクトとは、認識できるすべての物事の単位である。三種のオブジェクト；もの、「観念」、運動がある。オブジェクトは、粒度によって全体から切り取られ、属性を持つ。属性は、内部構造と(狭義の)複数の属性を持ち、値を持つ。粒度とは、扱う事物の空間的・時間的範囲と抽象度、密度とは、扱う事実のきめ細かさである。現実と目的の差異を認識して現実の変更が行われる。

2 . 根源的網羅思考

何かについての思考は、何かについての、A . 認識, 特定, 表現, B . 変更についての思考である。1 . 状況から比較的に独立した体系的知識については、事前に、**オブジェクト**、属性、これらの関係、命題、法則、領域の**型** [TS04]の網羅を行い、命題、法則の生成、修正をしておく。2 . 状況依存のものについてオブジェクト特定と極限的変更を行う。ア . オブジェクト単体、イ . オブジェクト間関係という軸もある。

A . 何かの網羅的認識, 特定 : 網羅されたものの中から何かを特定し、何かがどのようなものであるかを網羅された様々な粒度, 密度で言う。A1 . 状況から独立したオブジェクトの事前の網羅的認識、事前の網羅的なオブジェクト間関係、命題や法則の認識の上で、A2 . 状況に応じた認識, 変更予定オブジェクトの特定を行う。

B . 何かの根源的極限的網羅的変更 : 何かを、ある属性を維持しながら、他の属性を様々な粒度, 密度で極限的網羅的に変更して、そのもの全体の属性(狭い意味の属性と内部構造), 機能を変化させるか、全体の粒度(適用条件、適用領域)を変化させる。B1 . 状況か

ら独立したオブジェクト間の関係の、事前の網羅的な命題や法則の変更、B2 . 状況に応じたオブジェクト単独の変更、オブジェクト間の関係の変更である。

3 . A . 網羅的認識, 特定

状況から独立したオブジェクトの事前の網羅的認識、事前の網羅的な命題や法則の認識を考える。

あるものの特定について、何かの**外からの検討**、**内からの検討**という二つがある。一つは他のものとの差異を述べることである。これは、外からの検討に当たる。次はあるものの網羅された種類(型)と内部構造を述べることである。これは内部からの検討に当たる。

この意義は、二つある。一つは、議論のために、その議論の中で「何か」を固定して閉じておかないと論理が成立しない。二つは、そもそも課題は「何か」を変化させるためである。「何か」を変化させるためには、その変化を保証する開かれたものでなければならない。この二つは矛盾するが両立せねばならない。

例1として**制度**についての定義をあげる。

定義a : 制度は、変化を起こす共同観念、それを作ることと利用, 運用の総体である。

定義b : 制度は、オブジェクトが、組織(共同観念の内部構造)、属性(共同観念の機能)、共同主観、を持つものである。この定義は全体を網羅した空間的内部構造を述べる定義である。

4 . B . 何かの根源的極限的網羅的変更

命題や法則の変更の例を述べる。

次は、オブジェクトと属性との関係の命題の適用範囲を極限まで変更し、「定義」にまで拡張した例2である。

オブジェクトの二種類の「定義」として、一つは、カントからヘーゲルを経た、経済学・哲学手稿のマルクスによる、他の存在と相互作用するものが存在であるという、相互関係から存在の、再帰的、本質的な定義に至る把握を一般化し、存在に精神、運動を加えてオブジェクトに拡張する。これは外からの検討である。

もう一つは、資本論の冒頭で述べられている、それ自体の属性の集合体が商品だという把握を一般化し、商

品をものに拡張し、ものに精神、運動を加えてオブジェクトに拡張する。個別的な定義としてはこれも本質的な把握である。これは内からの検討である。

このいずれでも同じものを正確に完全に表現することができる。片方の言い方は他方を前提としておりその意味で相互作用がある。属性の集合体がオブジェクトであるという定義は、他の存在と相互作用するものがオブジェクトであるという定義によっている。オブジェクトの属性は対外的には機能となり他と相互作用するからである。他の存在と相互作用するものがオブジェクトであるという定義も、おそらく、属性の集合体がオブジェクトであるという定義を歴史的に総括して得られた。

定義は、定義されるものの変化、変更のためのもので、定義そのものも変化する。

オブジェクト間の関係や属性間の関係が、インプットとアウトプットの対応で表現される型の命題や法則について、インプットとアウトプット、条件の要素を網羅し、それぞれを論理的に極限まで変化させる。例3として、**質量転化の法則**の拡張がある。[FT09] 量質転化の法則は、属性の量と構成要素の量の変化によって、オブジェクト全体が別の質に変化するという法則だった。

第一の拡張：属性と構造、質転化の法則

この従来の量質転化の法則も、要素の変化と内部の構造変化も明示的に視野に入れて属性と構造、質転化の法則というべきものと拡張する。従来の量質転化の法則に比べて、要素の変化と内部構造の変化が全体の質変化をもたらすことが加わる。全ての量、要素の数、要素間の関係が同一でも、要素そのものが別のものに変わると、全体は別の質のものに変わりうる。全ての量、要素そのもの、要素の数が同一でも、要素間の関係が別のものに変わると、全体は別の質のものに変わりうることも同様である。したがって、属性の量、要素そのもの、要素の数、要素間の関係の変化が、全体は別の質のものに変わりうる。これで、自律運動に限定して、新しい質を生ずる全ての要因が網羅されたことになる。

第二の拡張：属性と構造、質的、非質的变化の法則

もう一段進めて、オブジェクトに新しい質を生ずるという前提を外す。つまり、オブジェクト一つに閉じた粒度では、属性と構造だけが、つまり属性、要素そのもの、要素の数、要素間の関係の変化が、質的にせよ、質的でないにせよ、オブジェクト全体を変化させる。これは、属性と構造、質的、非質的变化の法則というべきものである。オブジェクトの属性の変化には、個別のオブジェクトの属性の値の変化、内部構造の変化、属性の種類の変化がある。このタイプの法則について、変更の要素はこれで網羅されている。

第三の拡張：属性と構造、質的、非質的变化の法則の前提の拡張

さらに、自律運動に限定するという前提をはずしても、属性と構造、質的、非質的变化の法則は、成立する。

5. あとがき

現在把握されているほとんど全てのオブジェクト、オブジェクトと属性間の命題、オブジェクト間の命題や法則の粒度、密度は正しくないと言って良い。本稿では、これらの、型、粒度、密度の重要さを確認し、根源的網羅思考が単にこれらの「正しさ」のためにも有用であることも明らかになった。

参考資料

[TS04] 高原：「オブジェクト変化の型から見える TRIZ の全体像 - 機能とプロセスオブジェクト概念を基礎にした差異解消方法 その3」 第四回 TRIZ シンポジウム, 2008.09.

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2009Papers/TakaharaTRIZSymp2008/Takahara-TRIZSymp2008-090708.htm>,

[FT09] 高原：「弁証法論理の粒度、密度依存性」 FIT2009, 2009.09.

[FT10] 高原：「TRIZ と生き方における対立物の構造と根源的網羅思考」, FIT2010, 2010.09.

[TS06] 高原：「理想的 TRIZ TRIZ という生き方 その2」, 第六回 TRIZ シンポジウム, 2010.09

[TKHR] 高原利生ホームページ,

http://www.geocities.jp/takahara_t_ice/